

近代ギリシャの啓蒙期における 解剖学・生理学の受容

菅野 幸子

筑波大学医学医療系 法医学

はじめに

ギリシャはその国土の東側がアジアに隣接しているという地政学的特性のゆえに、ヨーロッパ諸国の中でも極めて独特の歴史を持つ国家である。古代から近現代に至るまで、オリエントの大帝国ペルシャやイスラム帝国、さらにオスマン帝国の政治的・文化的影響を強く受けつつ、近代初頭以降は西欧からの影響との双方があり、そのために諸科学の探究も紆余曲折の歴史を辿ることとなった。

トルコ軍による1453年のコンスタンティノープル陥落以来、400年近くに亘ってオスマン帝国の支配下にあったギリシャでは、自然諸科学の研究は長らく停滞を余儀なくされていた。しかしながら18世紀以降の国内の経済的發展に伴い、次第に裕福な大商人や知識階級（ファナリオティス）が台頭し、西欧諸国への留学が盛んになってくる。折しも西欧世界ではフランス革命等を経ての近代化が目覚ましく、西欧へ留学したギリシャの人々はかなりの衝撃を持ってこの大変革を受け止めた。

ギリシャ独立戦争の機運も、またそれに伴っての諸科学の發展の兆しも、西欧諸国の先進文化に大いに啓発されて、18世紀初頭から徐々に起こってくるのである¹⁾。

本稿では、そうした近代ギリシャの啓蒙運動²⁾の中で、医学の發展に大いに寄与することになった書物の一つ *Γραμματική των Φιλοσοφικών Επιστημών* (『科学哲学の基礎』, アンティモス・ガズィス編訳, ウィーン, 1799) を取り上げ、ギリシャにおける西欧医学の受容過程の一端を紹介したい。

1. 自然科学文献に見られる 西欧医学の受容

ギリシャにおいては、18世紀の段階では専門的医学書の刊行はまだ多くは見られない。しかしながら、当時は医師以外の知識階級（聖職者など）の手によって自然科学文献が徐々に発刊されるようになり、その中には西欧の医学的知見も少なからず盛り込まれている。ギリシャ人の中では、西欧の医学研究や医療技術に対する関心が、17世紀に比べると格段に高まっていくことが見て取れる。医学史家カラベロプロスによれば、主要な研究書、翻訳書として例えば以下のものが挙げられる。

- (1) Μεθοδίου Ανθρακίτη, *Οδός Μαθηματικής*, Venetia, 1749 (メトディオス・アントラキティス著, 『数学的方法』)
- (2) Νικηφόρου Θεοτόκη, *Στοιχεία Φυσικής*, Leibzig, 1767 (ニキフォロス・テオトキス編訳 『自然学原論』)
- (3) Ανθίμου Γαζή, *Γραμματική των Φιλοσοφικών Επιστημών*, Wien, 1799 (アンティモス・ガズィス編訳 『科学哲学の基礎』)

(1) の『数学的方法』では、医学的な観点からは、眼球の解剖図が描かれていることが注目すべき点である。近代ギリシャ語文献としては初めて描かれたものである。

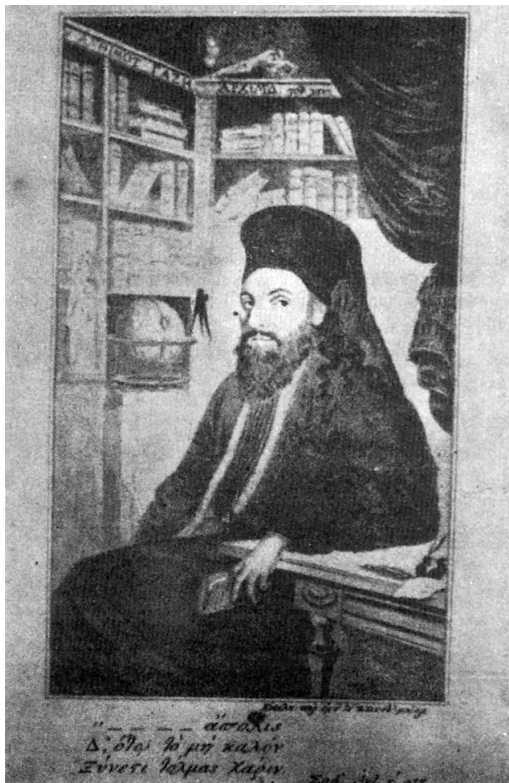
(2) の『自然学原論』は、様々な自然科学書の翻訳から構成されているものである³⁾。特に感覚器官についての解剖・生理学的知見が詳細に説か

れている点が特徴であり、本書の中にも眼球の解剖図等が記されている。

そして(2)の出版から30年余りに後に出版されたのが(3)のガズイスの書である。従来、解剖学・生理学の知見が部分的なものにとどまっていたものが、ガズイスによって初めて包括的に取りあげられることとなった。

2. アンティモス・ガズイス『科学哲学の基礎』に見られる医学的知見

アンティモス・ガズイス (Ανθίμος Γαζής, 1758–1828, 図1) は、近代ギリシャの文化的啓蒙運動に携わった重要人物の一人である。ガズイスは主としてウィーンで活躍した学者であり、聖ゲオルギオス・ギリシャ正教会の司祭を務めていた。彼はギリシャが独立を果たすためには、根本的にギリシャ民族のこれまでの隷属的な精神を自主独立



Χαλκογραφία τοῦ Ἀνθίμου Γαζή ἀπὸ τὸ βιβλίο
«Γραμματικὴ τῶν φιλοσοφικῶν ἐπιστημῶν».

図1

の精神へと変革することが必須であり、そのため何より教育改革の重要性を感じていた。彼は自然諸科学についての広範な啓蒙書、翻訳書を著している他、アダマンティオス・コライスとも親交があり、学術誌『ヘルメス・オ・ロギオス』の発刊に共に尽力したことで知られる。

『科学哲学の基礎』(Γραμματικὴ τῶν Φιλοσοφικῶν Ἐπιστημῶν, Wien, 1799) (図2) は、イギリス人ベンジャミン・マルティン (Benjamin Martin, 1704–1782) による *The Philosophical Grammar; Being a view of the present state of experimental physiology or natural philosophy*, 1735 の翻訳書である。このマルティンの書は版を重ねて、さらに各国語に訳されていった。ガズイスは主としてイタリア語訳及びフランス語訳を参照しながら、近代ギリシャ語への翻訳をしたといわれる。このガズイスの書の注目すべき特徴は、単なる翻訳ということにとどまらず、ガズイス自身による豊富な注釈や図版も挿入されている点である。

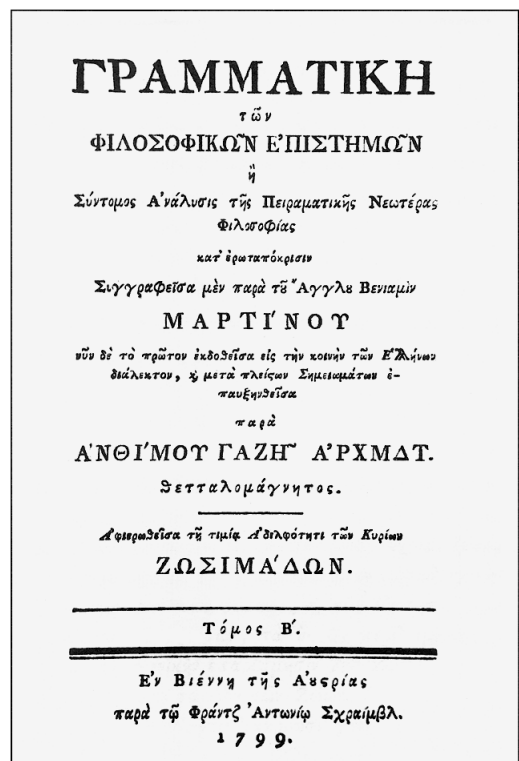


図2

本書は全2巻よりなる。第1巻では、西欧での自然科学の紹介がなされており、例えば、当時注目されていた顕微鏡についての使用法や、空気中の重要成分で呼吸に不可欠な元素として解明されつつあった酸素の特性⁴⁾などが述べられている。また第2巻では、人体諸器官の構造と機能が述べられている。ここではとりわけ当時の解剖学者ゾンメリング (Samuel Thomas von Sömmerring, 1755–1830) の書 *Von Baue des menschlichen Körpers*, Frankfurt, 1791–1796 も参照しながら翻訳したことが記されている。

とりわけ第2巻第5章は、解剖学・生理学原論ともいうべき内容となっており、極めて注目される箇所である。最初に或る質問が提起され、それに対する解答が記される、さらにその後も質問—解答、質問—解答という形式で展開されていく。本書に目次立てはないものの、この一連の質問を列挙していくと、全体としておよその論点はつかめるようになっていく。以下に主要項目を順に記していこう。

人体の実質的な部分とはどのようなものか／生命を構成する諸器官にはどのようなものがあるか／人体のその他の部分としてはどのようなものがあるか

骨とは何か、また骨はどのように形成されるのか／骨にはさまざまな種類は存在しないのか／骨はどのように機能するのか／人体にはどの程度の骨が存在するのか…… (以下、軟骨、靭帯について)

筋肉とは何か／筋肉には何種類あるか／筋肉の機能とは何か／筋肉の運動はどのようにして生じるか／人体全体において筋肉はどのくらい存在するか／…… (以下、腱、膜について)

どれを神経と呼ぶのか／神経の機能には何かあると考えられるか／神経は人体の感覚器官にどのように作用するか／人体にはどのくらいの神経があるか

どれを動脈と呼ぶのか／動脈はどこから組織されるのか／動脈はどこからきて我々の体の多くの部分でその拍動が感じられるようになるの

か／動脈と静脈の違いは何か／何故静脈は拍動しないのか……

脳の性質とはどのようなものか／脳の機能にはどのようなものがあるか

肺の性質とは何か／肺の機能にはどのようなものがあるか

心臓の性質及び構造はどのようなものか／心臓は全体として人体にどのように機能するのか

胃の性質はどのようなものか／胃はどのように機能するのか

肝臓の構造はどのようなものか／肝臓はどのように機能するのか

脾臓の性質と組織はどのようなものか／脾臓はどのように機能するのか

どれを腎臓と名づけるのか……／腎臓の本質はどのようなものか……

……以下、感覚器官、毛髪、子宮内での胎児の形成過程についての問いが続く。

この解剖学的説明の中で注目すべきことは、ガズィスによって人体解剖図 (図3) が挿入されている点である。原著にはなかったものであるが、理解しやすいようにと掲載されたものである。本書が出る以前は、近代ギリシャでは未だ人体解剖の全体図が付された書は存在していなかったとカラベロプウロスは指摘している。すなわち本書は、近代ギリシャ語で出版された書物の中で、初めて人体解剖の全体図が掲載された画期的な書ということである。

解剖学的知見についての包括的な説明がなされた後は、健康と病について、また睡眠と夢について、飢えと飽食、そして死について等々の議論に移っていく。この中でガズィスは、ドイツ人医師フーフェラント⁵⁾による *Die Kunst, das menschliche Leben zu verlängern* (Wien 1798) からの抜粋も紹介している。これはガズィスが出版する前年に出たばかりの書であり、常に最新の知見を取り入れようとするガズィスの強い関心が伺える。

『科学哲学の基礎』は解剖学、生理学の両面から、その後の近代ギリシャ医学の発展に重要な貢献をすることとなった。詳細な内容についてはあ

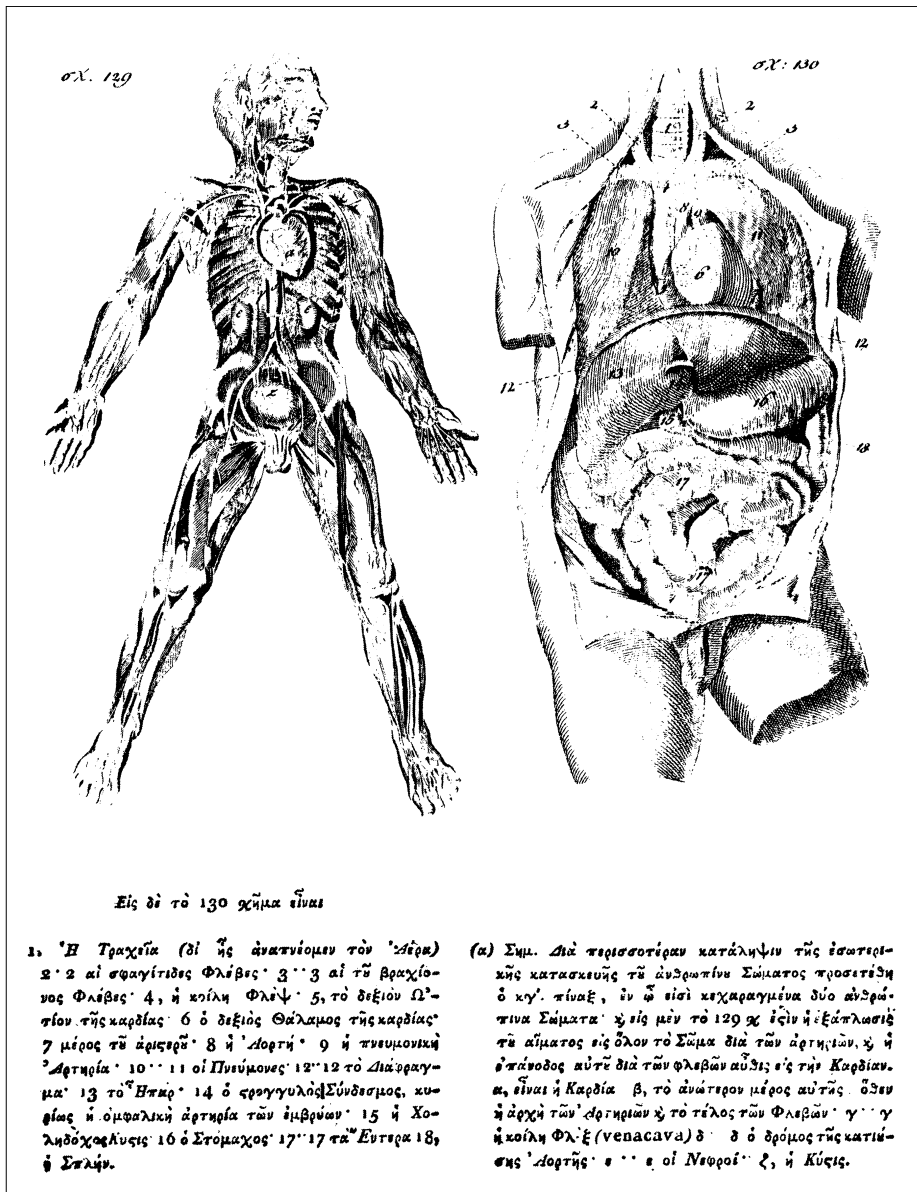


図3

らためて説く機会を持ちたい。

結語

近代ギリシャの啓蒙期には、聖職者等の知識階級も西欧医学の普及に当たって大きな推進役を務めた。その内の一つアンティモス・ガズイス編訳『科学哲学の基礎』は、当時の解剖学・生理学原論ともいふべき内容であり、ギリシャの人々に理

解しやすくするために、記者自身により豊富な注釈や図版が挿入されたことが特徴である。近代ギリシャ語の書物では、初めて人体全体の解剖図が掲載されたことも注目される。

注

- 1) ギリシャ独立戦争以前の啓蒙期に発刊された最も重要な学術誌としては、ウィーンで発刊された『ヘルメ

ス・オ・ロギオス』(Ερμής ο Λόγιος, Hermes the Scholar, 1811–1821)がある。当時の文芸復興の立役者アダマンティオス・コライス(Αδαμαντίος Κοραΐς, 1748–1833)によって発起された本雑誌は、自然科学, 社会科学全般に亘る総合的な学術誌であった。

- 2) 近代ギリシャの啓蒙運動(Νεοελληνικός Διαφωτισμός)は、およそ1750年~1830年までの間に、西欧の啓蒙思想を取り入れつつ起こった文化的, 思想的運動であり, トルコ支配から脱却し, ギリシャ民族としての覚醒を促すものであった。ギリシャのルネサンス(Νεοελληνική Αναγέννηση)とも呼ばれるこの啓蒙運動は, 当時の政治的・経済的状況と深く関連しており, その内実については『近代ギリシャ史』(ニコス・スポロソス著, 西村六郎訳, 白水社, 1988)に簡潔に記されている。
- 3) Abbate Nollet, *Lezioni di Fisica Sperimentate*, Venetia, 1747, Peter van Musschenbroeck, *Elementa Physicae*, Naples, 1751等からの翻訳および注釈を付して編集したものである。
- 4) ラボアジエ(Ant.-L. Lavoisier, 1743–1794)による『化学原論』への言及もあり, 自然科学の最先端を吸

取しようとする試みが本書の随所に顯われている。

- 5) フーフェラント(Christoph Wilhelm von Hufeland, 1762–1836)は, ベルリン大学初代医学部長を務め, ドイツの医学教育に多大なる貢献をした人物である。多数の著作があり, 中でも *Enchiridion Medicum oder Anleitung zur medizinischen Praxis*, Berlin, 1836 (『医学必携—医療実践のための手引き』)は自らの医学教育・研究の総決算として著した書として有名である。ヨーロッパ各国語に翻訳され, ギリシャの医師にも大きな影響を与えた。

参考文献

- Καραμπερόπουλος Δ. Γνώσεις ανατομίας και φυσιολογίας του Θεσσαλού Διδασκάλου του Γένους Ανθίμου Γαζή (1758–1828), Athens, 1993
- Καραμπερόπουλος Δ. Η Ιατρική Σκεψη μέσα από τα Βιβλία Φυσικής της Προεπαναστατικής Περιόδου, Athens, 1997
- Καραμπερόπουλος Δ. Η Ιατρική Ευρωπαϊκή Γνώση στον Ελληνικό Χώρο 1745–1821 (The Medical European Knowledge in the Greek Region 1745–1821), Athens, 2003